

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520564

研究課題名（和文） 高等教育における効果的な多読授業の研究－具体的な指導法の提案と普及－

研究課題名（英文） Suggesting Effective Extensive Reading --Practical Tips in Higher Education

研究代表者

上田 敦子（UEDA Atsuko）

茨城大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：30396593

研究成果の概要（和文）：

今回の研究においては、効果的な多読授業について具体的な指導法の提案をし、普及につとめるという二つの課題があった。研究代表者及び分担者らは、平素から多読授業に携わり、授業での工夫を行っている。よって、普段の研究活動をより精緻に行うことで、成果を出すことができた。

まず、指導法の具体的な提案としては、①記録をつけ、学生を観察することの意義、②指導者として教材研究の重要性、③より平易なものを教材として用意することの重要性、④音声をとめた教材の重要性、そして⑤学生の多様性に対応できる授業内容 などについて代表者・分担者それぞれが成果をあげることができた。

また、これらの結果をうけて多読に関する啓蒙書を3冊指導者向け・一般学習者向けとして執筆を行い、多読指導者や一般英語教員向けに発表の機会があったことで、啓蒙・普及にも貢献できた。

研究成果の概要（英文）：

Supported by this grant, the researchers were able to suggest practical, down-to-earth solutions for Extensive Reading Classrooms in higher education. The researchers wrote three books for teachers and learners of Extensive Reading, and made presentations about Extensive Reading to different audience both researchers and teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：多読、多聴、指導技術の向上、授業分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知されてきた多読授業

近年、多読を取り入れた授業が認知されるようになってきている。JALT（全国言語教育学

会)では多読をテーマとした SIG (Special Interest Group) が新たに立ち上げられ、総会では多読の研究者である Richard Day 氏が 07、08 年度とたてつづけに講演者として招待されている。日本多読学会では加入者が 07 年度には 107 名と増加している。「多聴多読マガジン」(コスモピア)という雑誌も創刊され、07 より隔月刊として成功しているようだ。洋書専門店が多読用 GR や児童書のスペースが広がり、多読の手法を取り入れるようになった教育機関が増えてきたことが伺われる。

多読 (Extensive Reading) の効果や意義は Day & Bamford (1998)、Grabe & Stoller (2001)、Nattall (1996)、Mason & Krashen (1997)、Krashen (1993) らによっても主張されている。

## (2) 現場での実情

上記のように認知度は高まってきているが、英語教育の現場は必ずしも整備されてきているとは言えない。「多読」についての認識には一般の英語教員の間でもかなり大きな幅があり、また解釈の違いや教材の選び方などにより、せつかくの現場での努力が効果的な結果につながらないこともあるようだ。

・研究分担者でもある Takase (2007) は高等学校において多読を授業に取り入れている教師とそうでない教師を調査し、両者の間に大きな意識・知識の差があることを指摘している。

・山崎・伊藤・島本の「多読指導の効果的な方法とは? 日本の英語教育における多読指導に関する実態調査」(2007)によると、教員が大学において多読を取り入れない理由として「学生の読解力不足」を挙げる回答が 1/3 もあった。読解力が不高いと多読はできない、と認識している教員が多いことがうかがわれる。

・上記の山崎らの調査の中では「教科書以外の副読本を使用する」ことを全て多読と読み替えており、多読と銘打ってはいても同一の Graded Readers を全員で精読させている授業の例なども報告されている。本研究は精読を否定するものではないが、多読と精読では目的も読ませる素材にも違いがある。その違いが理解されていない例であるといえる。

## 2. 研究の目的

漠然と多読の指導方法を説明するのではなく、1) なるべく平易な教材から導入し、次第にレベルを上げていくこと、2) 授業の中にまとまった時間を用意して読む時間を確保し、その中で適切な個別対応を行うことなどは大きなポイントである。なぜそのような指導

が必要か、そのためには何を具体的に行わなくてはならないか、を明らかにする。

その結果として、多読指導教員向手引きを作成することを目標とする。

ひとつの型にはめ込むのではなく、教員が一部だけ取り入れ応用することも可能な例を多く提示する。一人の実践者の経験にのみよるものではなく、十分に複数の実践者によって検討された方法を紹介・提案していく。

たとえば、「授業内で多読をする場合は学生にアドバイスを与える」とただ書くのではなく、「どのような学生がどのようなアドバイス、サポートが必要か、どういう場面でどの程度のアドバイスを与えるか、時間が充分ない場合はどうするか」といったレベルで詳しく記述することにする。

## 3. 研究の方法

(1) 多読実践者である本研究担当者がお互いの授業について記述、分析

(2) 他の実践者(教員)との情報交換、授業見学、取材

(3) 海外における多読研究者、海外機関に取材

「課外で副読本を読む」だけではない多読授業が普及していくことで、大学生の英語の読み方は変わる

授業内に行う多読指導、一見易しすぎる教材から読み始める方法など、応募者が提案することになる多読授業の姿は、従来の「課外に副読本を何冊か読ませておく」タイプのものではない。この「古いようだが実は新しい」指導法の普及に貢献できれば、英語の本を気軽に読む大学生の姿がキャンパス内で頻繁に見かけられるようになったり、図書館で英語の本の貸し出しが増加するなど、大学生の読書習慣に変化を起すことも可能であろう。

これらの理由から、本研究の意義は大きい。

## 4. 研究成果

(1) おのおのの研究者がそのテーマごとの研究を進めることができた。

① 研究代表者は、多読と学習スタイルについて調査を行った。「多読は読書を好む学習者には効果的かもしれないが、その他の学生にはあまりアピールしないのではないか」「簡単な絵本は特にそれを好む学生にしか興味深い教材とならないのではないか」などの質問、疑問がよく「簡単などころから始める」多読授業の説明を行ったときに投げかけられる。そこで、代表者は学習者個々の違いを学習スタイルの違いと

- 捉え、それらのタイプごとに多読授業の参加度や読書量が違うかどうかを調査した。結果として、どのタイプにおいても統計的に違いは見出されなかった（「学会発表」①および⑥において発表）。これにより、多読がより多くの学習者に向けて提供できる学習方法だと主張することができる。
- ② 京都で行われたThe First Extensive Reading World Congressでの発表、また、Asia TEFLでの発表などにより、それぞれの研究者のテーマごとの多読にかかわる発表を行うことができたので、達成できたと言えるだろう（神田：語数を記録する意義、黛：多読の素材と学習者のレベルについて、高瀬：教員と学生のモチベーション）。
- ③ 多読とシャドーイングの相乗効果については、統計的にはまだはっきりとした結果が得られていない（「論文」の①）。しかし、音声を含んだ教材を使うことにより、いままでそのような教材をあまり導入していなかったクラスにおいて、大いに学生のモチベーションがあがり、読書量が増えたことが観察され、また、学生の記述によりあきらかになった。
- ④ The First Extensive Reading World Congressが京都で行われ、国内外の研究者と情報交換ができたこと、また、
- (2) マニュアルを作成し、学習者・教員などの指導者に情報発信するというのが当初の目標であった。
- ① 高瀬、神田、黛、上田らはそれぞれ教員や一般の多読学習希望者に対して多読を進めるマニュアルを出版できた。(5. 参照のこと)これによって多読学習方法の普及という本研究の目的は十分に果たされたと言えよう。
- ② JALT 茨城の Mini-Conference では、地域の中学・高校・大学の教員の方を中心に、多読の指導の進め方を解説しながら、さらに学習スタイルとのかかわりを伝えることができた。ここでも、当初の地域の中・高の先生方に多読の効果を普及させる活動ができた。
- ③ ついては、多読に関するより一般的なポータル的な手引き（リンク集）を用意することで、追加的なマニュアルの代わりとする。この手引きは、CD-ROM データで作成したが、ポータルサイトとして平成 24 年上半年期のうちに茨城大学内のサーバーにもアップロードする予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① Takayuki Nakanishi & Atsuko Ueda "Extensive reading and the effect of shadowing" Reading In A Foreign Language Vol23, No. 1, pp. 1-16, 2011. (査読あり)
- ② 神田みなみ 「英語多読の長期継続における語数の意義 The significance of word count in long-term extensive reading」言語・文化・社会 学習院大学外国語教育研究センター 9 巻 pp.127-142 2010 (査読あり)
- ③ Kanda, M. Japanese university EFL learners' vocabulary learning strategies. *The Journal of Heisei International University* 14 pp. 1~22, 2010 (査読なし)
- ④ Kanda, Minami The pleasures and pains of extensive reading. *PAC7 at JAL T2008: Shared identities: Our interweaving threads* pp. 1201~1211, 2009 (査読あり)
- ⑤ 神田みなみ 「英語多読の長期継続-大学生 3 年間のケーススタディ」国際異文化学会編『国際異文化研究 6』pp. 123~148, 2009 (査読あり)

〔学会発表〕（計 7 件）

- ① Atsuko Ueda "Extensive Reading and Learning Styles" JALT Ibaraki Mini-Conference 平成 23 年 12 月 11 日水戸、茨城
- ② Minami KANDA "How Word Count Counts in EFL Extensive Reading" The First Extensive Reading World Congress 平成 23 年 9 月 4 日京都産業大学
- ③ Michiko MAYUZUMI "An effective ER program for students with low English ability" The First Extensive Reading World Congress 平成 23 年 9 月 4 日京都産業大学
- ④ Kyoko UOZUMI, Atsuko TAKASE "Teachers' Motivation to Implement Extensive Reading in Class" The First Extensive Reading World Congress 平成 23 年 9 月 4 日京都産業大学
- ⑤ Atsuko Ueda and Takayuki Nakanishi "The effect of learning styles on extensive reading" The 9th ASIA TEFL International Conference 平成 23 年 7 月 29 日ソウル、韓国
- ⑥ Atsuko Ueda "Start your ER class with VERY EASY level and promote fluent,

autonomous learners” The 8th ASIA TEFL  
INTERNATIONAL CONFERENCE 2010年8月7  
日 Hanoi, Vietnam

- ⑦ Takase, Atsuko The Effects of SSS & SSR  
on Any Level of University Students.  
Japan Extensive Reading Association  
2009 2009年8月22日豊田高等専門学校  
(豊田市)

[図書] (計3件)

- ① 高瀬 敦子 大修館書店「英語多読・多聴  
指導マニュアル」237ページ、2010  
② 古川昭夫・上田敦子 コスモピア「やさ  
しい本からどんどん読もう! 英語多読入  
門」235ページ、2010  
③ 神田みなみ・黛道子、ほかコスモピア『英  
語多読完全ブックガイド』(改訂第3版)  
512ページ、2010

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上田 敦子 (UEDA Atsuko)  
茨城大学・大学教育センター・准教授  
研究者番号: 30396593

### (2) 研究分担者

岡山 陽子 (OKAYAMA Yoko)  
茨城大学・大学教育センター・准教授  
研究者番号: 20396592

神田 みなみ (KANDA Minami)  
平成国際大学・法学部・教授  
研究者番号: 20327125

黛 道子 (MAYUZUMI Michiko)  
順天堂大学・医療看護学部・准教授  
研究者番号: 30331391

高瀬 敦子 (TAKASE Atsuko)  
近畿大学・法学部・講師  
研究者番号: 60454633